春の音楽　春を描いた音楽もしくは春に縁のある音楽

1. Antonio Vivaldi (1678 – 1741) :
Violin協奏曲集“和声と創意の試み, Il cimento dell‘armonia e dell’inventione”, op.8
“四季, Le quattro stagioni” の**第1曲 A-Dur RV 269, “春, La Primavera”**

Vivaldiは1703年の9月、VeneziaのSanta Maria della Pietà 教会付きの児童養護施設 “Pio Ospedale della Pietà”ピエタ慈善院に付属する音楽院でviolin指導者となります．それから30年以上、作品を書き続けます．作曲家としての最初の成功は、12曲の1台、2台、4台と弦楽合奏のための協奏曲集 (Concerti) “L‘estro armonico” 調和の霊感 op.3 (1711年出版)です．

四季(Le quattro stagioni)は1718−1720年の間に作曲しています．この時期、Mantovaを統治していた、Philipp von Hessen-Darmstadt 公子(1671 – 1736)の宮廷楽長の職位に就いています．Mantova近郊の田舎風景に、この協奏曲集の発想を受けたのかもしれません．Vivaldiは、せせらぎの流れ、鳥の声、犬の遠吠え、蚊の羽音、羊飼いの声、嵐、酔っ払った踊り手、夜の静けさ、狩人達、氷上の子供達、冬の暖かい暖炉などを描写しています．各協奏曲は おそらくVivaldi自身が用意したsonnet詩と関連付けて、音楽の情景描写を説明しています．これら4曲は、他の8曲と12曲からなる協奏曲集 “Il cimento dell‘armonia e dell’inventione” Op.8 として、1725年にAmsterdamのMichel-Charles Le Cèneが出版しています．

Sonnet

I. Allegro	
Giunt'è la Primavera	春がやってきた、
e festosetti la Salutan gli Augei con lieto canto,	そして、鳥たちは楽しく陽気な歌で春に挨拶し
E i fonti allo Spirar de' Zeffiretti	そして、泉はそよ風に誘われ、
Con dolce mormorio Scorrono intanto	優しくささやきながら流れはじめます
Vengon’ coprendo l'aer di nero amanto	黒いマントで空を覆い
E Lampi, e tuoni ad annuntiarla eletti	稲妻と雷鳴が春の到来を告げに来て
Indi tacendo questi, gli Augelletti	静まった後に、小鳥たちは
Tornan di nuovo al lor canoro incanto	もう一度、素晴らしい声で歌いはじめます
II. Largo	
E quindi sul fiorito ameno prato	そして、花の咲く心地よい牧草地の上で
Al caro mormorio di fronde e piante	葉や木の優しいささやきに
Dorme'l Caprar col fido can à lato.	羊飼いが頼もしい犬を横に眠ります
III. Allegro	
Di pastoral Zampogna al suon festante	牧歌パイプの賑やかな音に
Danzan Ninfe e Pastor nel tetto amato	妖精と羊飼いは楽しそうに踊り
Di primavera all' apparir brillante.	春は輝いています

solo : Alana Youssefian
Voices of Music
2015

ここで取り上げている他に、春に関わる音楽作品は、
- Franz Joseph Haydn (1732 – 1809)のオラトリオ「四季 (Die Jahreszeiten)」の第1部 “春”
- Wolfgang Amadeus Mozart の歌曲 “春への憧れ, Sehnsucht nach dem Frühling” F-Dur, K. 596
- Franz Peter Schubert (1797 – 1828)のピアノ五重奏曲 A-Dur “鱒, Die Forelle”, D667
- Felix Mendelssohn Bartholdy (1809 – 1847)の無言歌 第5巻 “春の歌, Frühlingslied ” op.62-6
- Robert Schumann (1810 – 1856)の交響曲第1番 B-Dur op.38 “春, Frühling”
- Johann Strauss II. (1825 – 1899)のワルツ “春の声, Frühlingsstimmen”, op.410
- Aaron Copland (1900 – 1990)のバレエ曲 “アパラチアの春, Appalachian Spring”

等々多く有ります．

2. Ludwig van Beethoven (1770 – 1827) : **Violin Sonata 第5番 “春, Frühlingssonate” F-Dur, op.24**

Beethovenが30歳の頃(1800,1801年)に作られた作品です．春という呼び名はBeethovenが付けてはいません．亡くなった後に出版された譜面に、この愛称が現れます．愛称の経緯は明らかになっていません．この様な例は、他にもあり、ピアノ協奏曲第5番の愛称「皇帝」は英国の出版社が付けています．愛称は聴き手の印象で、多く愛された作品に付き定着します．

1. Allegro
2. Adagio molto espressivo

Violin : Alina Ibragimova, Piano : Cédric Tiberghien
22 de enero de 2020,
Fundación Juan March, Madrid

3. Ralph Vaughan Williams (1872 – 1958) : **The Lark Ascending, 揚げひばり(春の季語)**

単一楽章のこの曲は、George Meredithが1881年に発表した同名の詩に発想を得た作品です．元々は独奏Violin、ピアノ伴奏による作品(1914)で、これを管弦楽伴奏に作り直し、1921年にMarie Hall (1884 – 1956)のViolin、Sir Adrian Cedric Boult (1889 – 1983)の指揮で初演します．

手書きのスコアの最初に、メレディスの詩から、次の12行を引用してます．

He rises and begins to round,	彼は高く舞い上がり、そして円を描きはじめる
He drops the silver chain of sound,	彼は鳴き声の銀の鎖を落とす
Of many links without a break,	いくつもの切れることのない線となって
In chirrup, whistle, slur and shake.	さえずり、鳴き声、弧を描きそして振るわせる
For singing till his heaven fills,	歌声が空に満ちるまで歌うのは、
’Tis love of earth that he instils,	それは、彼が染みこませる大地の愛
And ever winging up and up,	そして、また舞い上がる
Our valley is his golden cup,	私たちの谷は彼の金の杯
And he the wine which overflows	そして、彼はワインを溢れさせて、
To lift us with him as he goes.	彼のように、彼と共に私たちも浮かび上がらせる
Till lost on his aerial rings	彼の空の輪に夢中になるまで
In light, and then the fancy sings.	光の中で、そして気ままに歌う

Vaughan Williamsの作品は牧歌的な雰囲気を持った作品が多く、Greensleevesの様な英国の民謡も使っています．古風で郷愁に溢れた旋律を使い、色彩に富んだ和声と楽器の編成による響きを使っています．これは、1908年のパリで3か月間指導を受けたMaurice Ravel (1875 – 1937)や、尊敬するJean Sibelius (1865 – 1957)の影響を受けていると考えられます．

英国の騎士団勲章、メリット勲章(Order of Merit)を受けています．また、Ralphと書いてラルフではなく、古風な発音のレイフに本人が拘ったことから、この読み方で呼ばれています．

solo : Tasmin Little
London Mozart Players
St Giles Cripplegate Church
in London, 2020.

4. Ottorino Respighi (1879 – 1936) : **交響詩 “ローマの松, Pini di Roma”**

レスピーギは、ローマにある松の木を通じて、古い時代に起きた歴史を描こうとしています. その為に、グレゴリオ聖歌、古い教会旋法を使っています. 各曲にはレスピーギ自身が説明を付けています.

第1部 ボルゲーゼ荘の松　I pini di Villa Borghese
　ボルゲーゼ荘の松の木立の間で子供たちが遊んでいる・・・
非常に華やかなオーケストラ使いで、光に満ち生命感に満ちた賑やかな春を描いています.

第2部 カタコンバ付近の松　Pini presso una catacomba
　カタコンバの入り口の松の陰で、奥から祈りの聖歌が響いてくる
　そして、荘厳な賛歌のように大気にただよい、しだいに神秘的に消えてゆく
静かな場所に漂う、古き時代の荘厳な賛歌を描いています. 曲の最初に聞こえてくる古き旋律のTrumpetの独奏は舞台裏(場外)で吹いています. 楽譜には、il più lontano possibile (出来るだけ遠くから聞こえるように)、interna (舞台裏)となっています.

第3部 ジャニコロ丘の松　I pini del Gianicolo
　ジャニコロの丘に、明るい満月の光に映えて松が立っている
　夜鶯が啼いている
曲の最後にはナイチンゲール(小夜啼鳥)の鳴き声が聞こえてきます.

第4部 アッピア街道の松　I pini della Via Appia　は割愛

Orchestre de Paris　パリ管弦楽団
指揮 : Gianandrea Noseda
La Salle Pleyel, 2014/06/25

5. Claude Debussy (1892 - 1894). : **牧神の午後への前奏曲　Le Prélude à l‘Après-midi d’un faune**

この曲の描いている季節は、喜びの春というよりも夏に近い春です.
Debussy自身の説明
　この前奏曲の音楽はステファヌ・マラルメ(Stéphane Mallarmé)の美しい詩を自由に
　描いています. 何らかの意図で曲を組み立てることはしていません.
　むしろ、午後の暑さの中で、牧神(Faunus)の欲望や見る夢の場面を発想し、
　妖精たちを追い回し疲れ眠りに就き、自然から受ける夢を描いています.

Mallarmé自身は彼の詩が音楽の元となることを望んでいなかった様ですが、
Debussyの招待で初演に出席したMallarméはDebussy宛に「感動した」と手紙を書いてます.
　貴方の描いた「牧神の午後」は、私のテキストと、何の不協和音を示していません.
　更に、郷愁と光、巧みさ、官能性、豊かさではるかに超えています.
　貴方に握手を、Debussy様、敬具、Mallarmé

牧神のフルート独奏の音域は低く、演奏しやすい音域ではありません. 批判的な意見も有ったのですが、敢えて、この音域を使うことで、曲の色彩を表現しています.

le Prélude à l'Après-midi d'un faune
指揮 : Cristian Măcelaru
l‘Orchestre national de France　フランス国立管弦楽団

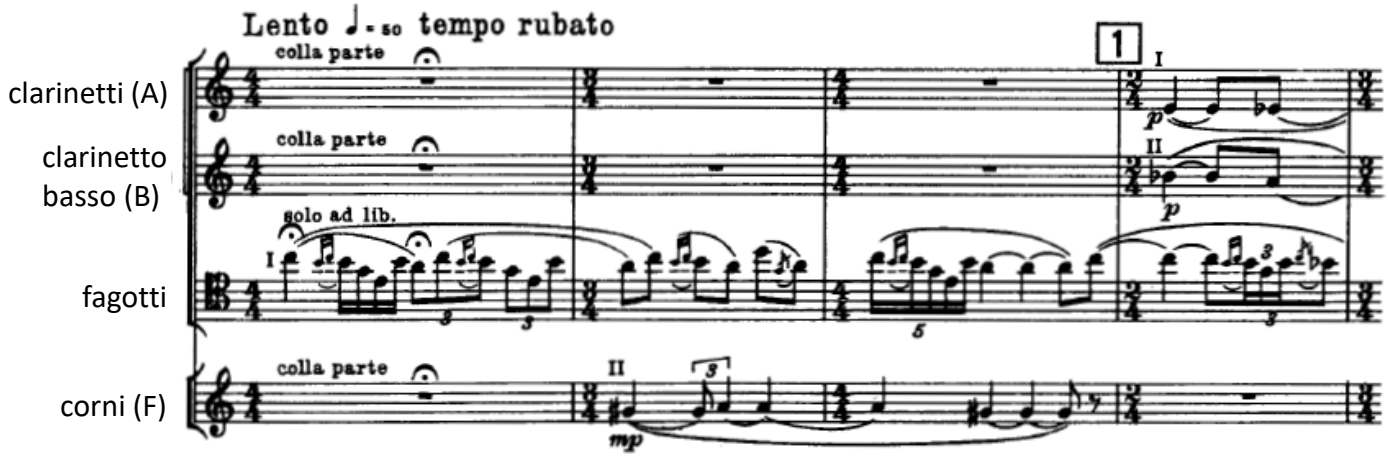
6. Igor Stravinsky (1882 – 1971) : **春の祭典　Le Sacre du printemps**
イーゴリ・ストラヴィンスキー (露 : И́горь Фёдорович Страви́нский)
ロシア、サンクトペテルブルク近郊のオラニエンバウム(現 ロモノソフ)生まれ、
サンクトペテルブルク大学法学部に入学(1901年)、友人の伝でリムスキー＝コルサコフに師事しています.
数回訪米後、1939年9月にハーバード大学からの依頼で渡米し、音楽に関する6回の講義の後、そのまま米国にとどまり(亡命)、ハリウッドに居住後、1945年にアメリカ合衆国の市民権を得ています. 88歳でニューヨークで亡くなっています.

ストラヴィンスキーの音楽は、リズムが複雑であること、強烈な不協和音を使っていること、これまでの西洋音楽とはかなり距離を置いた、古風とも神秘的とも言える旋律が、特徴です. 歯切れの良い音を好み、オーケストラ使いは巧く、楽器のソロを多用し難度を上げています. 当時は、世間を騒がせ議論の多い、好き嫌いのハッキリ分かれる音楽が多くあります.

仏 : Le Sacre du printemps 聖なる春　ストラヴィンスキーは曲名を仏語で書きます.
セルゲイ・ディアギレフのバレエ団バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)のために作曲したバレエ音楽で、1913年に完成し、同年5月29日に初演しています.

春と言っても、季節の風景を描いていません. バレーの物語には、スラヴ神話に登場する神イアリロの名前が登場します. キリスト教以前、古代スラブの原始宗教にあったとする儀式を描いています. 物語にある春の躍動感が伝わってくる作品となっています.

第1部 大地の礼賛
1. 序奏
幕が上がる前に、春の笛(dudki, dentsivka)群を真似ています. (Stravinskyの説明)
リトアニア民謡 “Tu mano seserėle (私の妹よ)” を元にした作品です. ファゴットの高音から始まる技巧的な独奏で始まります. 弦楽器を挟みながら、コールアングレ(仏: Cor anglais, 英 : English horn, 伊 : Corno inglese), 小さなクラリネット(D-clarinetと呼びます)、オーボエ、フルート、クラリネット、アルトフルートも技巧的に加わります.
音楽は神秘的で、古風で、浮遊感のある雰囲気を作り、楽器が増えて行きます.

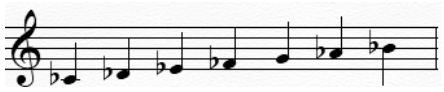


tempo rubato : 時間を盗む→自由なテンポで(動かす)　対) tempo giusto
colla parte : partに貼り付いて→主旋律に合わせる
solo ad lib. : 自由に独奏　(休んでも良い)　対) obbligato
≒似ている音楽用語 : a piacere 自由に (好きなように)

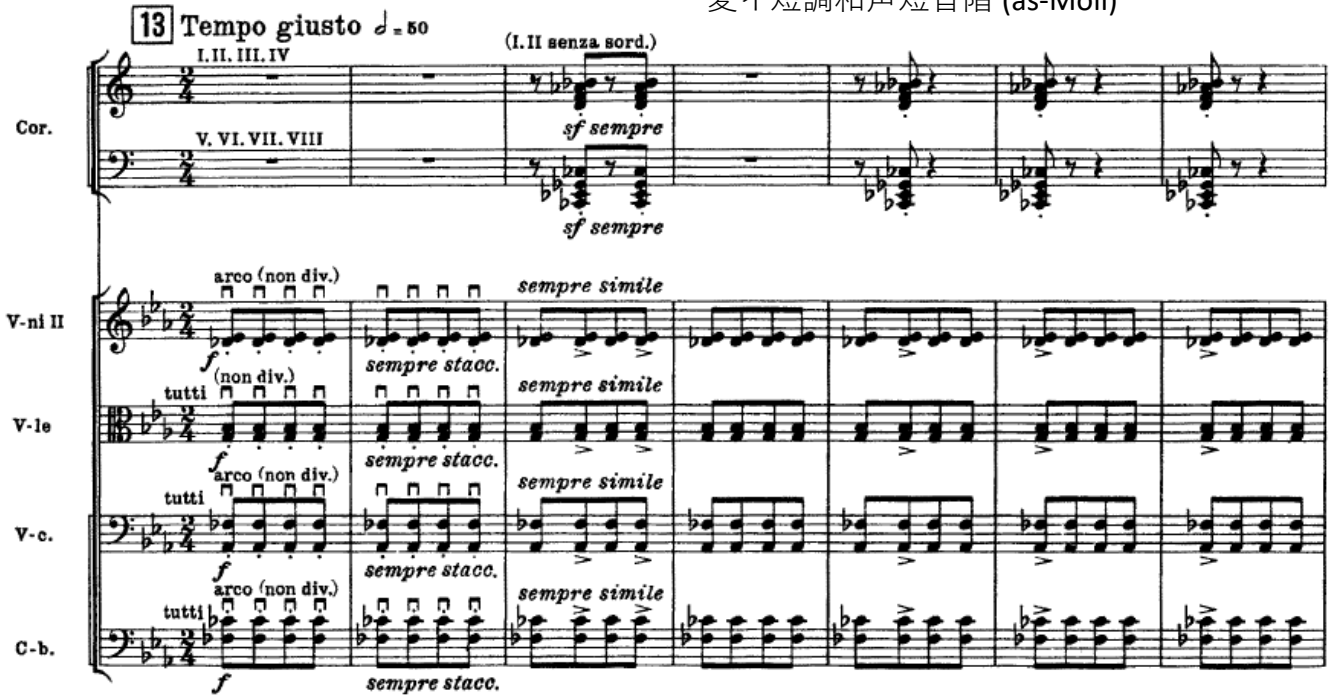
2. 春のきざし(乙女達の踊り)
春の儀式が丘の上で始まり、老婆が予言の儀式を始めます.
儀式の周りでは、若い男女が踊っています.

冒頭から弦楽器が、全ての音を同時に鳴らす不協和音が続きます.
この曲に使っている不協和音は、音楽の調性を脅かしながらも、後に続く木管群の音(ハ長調)を自然に受け入れます. 調性を保持しながら、不協和音をトーンクラスタ的な効果音として巧く使っています. 調性を保持した音楽で、無調性や12音技法の現代音楽よりも、ロマン派音楽の延長線上にある拡張版として聴くことが出来ます.
Stravinsky自身は無調性の音楽や12音技法には否定的で、晩年に認めてはじめ新しい可能性を探った範囲を除き、調性音楽を基本としています. (20世紀の)新古典主義と呼ばれる音楽に大きな影響を与えています.

また、変拍子(拍子が短い単位で変化する音楽の拍子)は、旋律線の拍感に忠実に沿っています. 慣れが必要かもしれませんが、不自然さの少ない変拍子になっています.



下記例譜の弦楽器が出す音を整理すると
左の様になります.
変イ短調和声短音階 (as-Moll)



ロマン派以降の音楽は、多様な色彩の音色を求め、多くの種類の管楽器を使う様になります. Richard Wagner (1813 – 1883)は、Wagner tubaという新しい楽器を考案し使い始めています. 以降、Bruckner, Mahler, Stravinsky他がこの楽器を採用しています. また、クラリネット等の木管は、様々な音域の楽器群を使うようになります. フルート群のピッコロ、アルトフルート、クラリネット群のバス・クラリネットや短いクラリネット等の楽器を使うようになります.

音域を拡げるという目的もあるのですが、それ以上に、音色に変化を付けることを目的としています. 音色を変化させる為に、金管楽器や弦楽器にミュートを、多様な打楽器や鍵盤楽器を使うようになります. 結果としてオーケストラのサイズは大きくなります.

この曲の楽器編成は5管編成、木管 : Flute (3種類-5人), Oboe (2-5), Clar.(3-5), Fagott (2-5),
金管 : Horn (2-8), Trp. (3-5), Trb. (3人), Tuba (2人), 打楽器 Timp. (7-2), その他(7-4) + 弦楽器
人数は100人を軽く超えます.

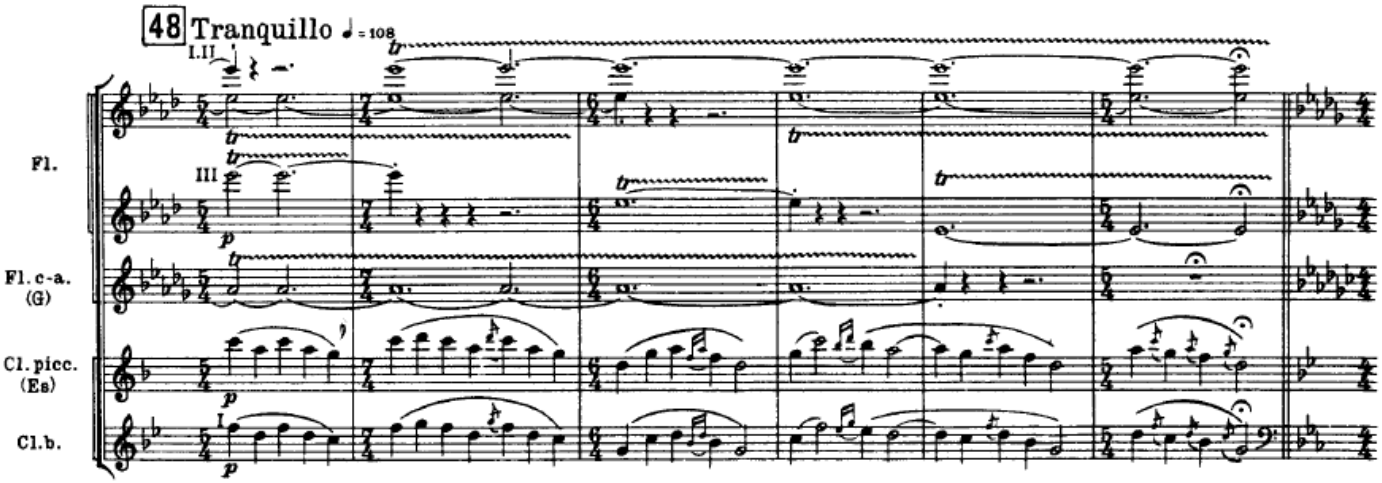
春の音楽　春を描いた音楽もしくは春に縁のある音楽

L‘Orchestre Philharmonique de Radio France　　フランス放送フィルハーモニー管弦楽団
指揮 : Mikko Franck
Auditorium de la Maison de la Radio (Paris)　　2017/11/15

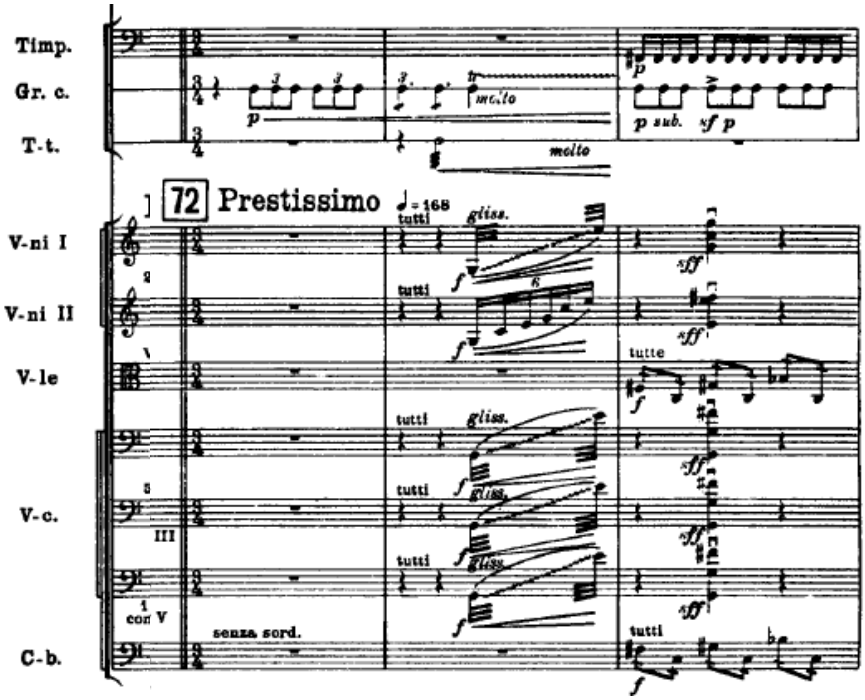
時間に余裕があれば・・・

4. 春の輪舞　Rondes printanières
若い娘たちが、古いロシアの舞踏、ホロヴォドkhorovodを踊り始めます. 春のロンド
このホロヴォドは遊戯の要素も多い群舞で，本来は農耕儀礼と関係して，種まきから取入れまでを劇化したものなどがあったようです.

ゆったりとした音楽を繰り返し、旋律には民謡に使われる音階を使い、古き春を描いています.



6. 大地の踊りと崇拝　Danse, L‘adoration de la Terre
人々は情熱的に踊り、大地を清め、大地の一部となります.
音楽は前触れ無しに急に終わります. 非常に短い音楽です.



余談
12音技法 (dodecaphony, 英: Twelve-tone music、独: Zwölftonmusik)

Arnold Schönberg (1874 – 1951)は、R. WagnerやC. Debussy, R. Strauss等が和声学を変化させていた状況を受けて、調性の扱い、不協和音の扱いを模索します.

1908年12月12日にWienのBösendorferホールで披露された弦楽四重奏曲 第2番等の作品を、弟子のAnton WebernやAlban Bergらと発表しています. 12年の試行錯誤を経て Schönbergは“相互の関係のみに依存する12の音による作曲法” (独: Methode des Komponierens mit zwölf Tönen aufeinander bezogenen Tönen)と呼ぶ「12音技法」の理論を完成させています.

12音技法は、Octave内の12の音を均等に使い、調性から離れようとする技法です.
無調の音楽となりますが、12音技法を用い、調性に似た統一感が得られるとしています.

Paul Hindemith (1895 – 1963)は、12音技法も一種の調性であると主張しています.
Hindemithは、Schönbergらの無調音楽に対して否定的でした. 自然倍音から考察しています.
Hindemithは、複数の音が鳴ると、周波数の和と差の音が発生する現象に着目し、結果的に複雑な不協和音、半音階的旋律も、複数の音の間には調性的な支配関係が存在し、完全な無調は存在し得ない、と主張しています.

<u>個人的な感想</u>
ピタゴラス(Pýthagórās, 582BCE – 496BCE)は、鍛冶屋の金床や金槌の音の高さは、重さによって作られ、重さの比率から作られる倍音から、音律(音階の周波数構成)を作り出し、その後、西洋音楽の発展から調性音楽が成立していきます. この歴史を振り返ると、Hindemithの出した「一連の音の列の間には必ず支配関係が存在している」という結論には説得力があります. 旋律、伴奏に音の列が存在している限り、自然と音の間には、支配関係が存在することになり、調性が生まれます.

Igor Stravinsky (1882 – 1971)は、12音技法について検討しています. HindemithとStravinskyは知り合いです. Hindemithも戦後1946年1月に米国に移っています. この二人はこの話をしたのでしょうか?

Arnold Schönberg
(1874 – 1951)

Igor Stravinsky
(1882 – 1971)

Paul Hindemith
(1895 – 1963)

余談　SonataとConcertoについて

Sonataという言葉は、伊語 sonare(鳴らす)に由来し、器楽曲と同義です．この言葉は、伊語 cantare(歌う)に由来するCantata 声楽曲と対です．

Concertoは、Concertと共に、con(～と共に)+cert(確信、特定)から “集まる”, “協調する”という意味になり、音楽では集まって音楽をする「合奏」を意味します．現在のConcertoは、独奏楽器が中心ですが、これは古典派以降の話です．歴史的には、16世紀半ばのイタリアでConcertoと呼ぶ曲が現れます．これは声楽曲に器楽を伴う合奏を指しています．イタリアとフランスでは、特定の楽器(群)が短い独奏を持つようになります．

16世紀後半のVenezia楽派では、聖マルコ大聖堂の音響空間から、交互に演奏する交唱様式を用い分割合唱(cori spezzati)様式が生まれ、2つの群が交互に演奏する音楽の様式をConcertato様式と呼ぶようになります．

仏語のコンセール(concert)は、管弦楽組曲を指す言葉です．17世紀の宮廷では、楽器演奏を嗜みとする王侯達が宮廷楽師と共に合奏を楽しみ、御前演奏で、特定の楽章で特定の楽器に独奏的な活躍の機会を与える様になります．

初期の協奏曲は合奏協奏曲(concerto grosso)と呼び、独奏パートは有りません．徐々に独奏楽器群 Concertino と伴奏側 Ripieno(間を埋めるという意味)楽器に分化して行きます．BachのBrandenburg協奏曲集で、書かれた順を追い、6番、3番には独奏楽器は無く、2番や5番には独奏楽器群があります．Baroque中期以降、協奏曲は合奏協奏曲から独奏協奏曲へ、徐々に推移します．合奏協奏曲から独奏協奏曲へ変化に沿って、独奏中心への傾向は高くなります．

古典派(Haydn, Mozart)の頃、Sonata, Concerto, 歌劇の序曲など用いている、音楽を展開させる構成方法をSonata形式と呼び、Franz Joseph Haydn (1732 – 1809)の時代に原型が成立しています．そして、その後ロマン派の時代には、Beethovenの作品をSonata形式のモデルとしています．

Sonataでの楽器の扱い方は自由で多様です．例えば、Violin Sonataの場合、楽器はViolinとPianoで、基本的に楽器の扱いは対等です．Mozartの初期のViolin sonataを見ると、Violin付きPiano曲と言える程、Pianoを中心に扱い、Violinの扱いは添え物の様に小さくなっています．これは、当時の楽器の扱いを反映しています．Mozartは、K.296以降のViolin sonataで、ViolinをPianoと対等に扱い始めています．Mannheimを訪れ、宮廷楽師と触れ会ったことが影響しているようです．

協奏曲の特徴となる音楽の要素の一つにCadenzaがあります．Cadenza(伊, 独: Kadenz)は、独奏協奏曲やオペラのAriaにあり、独奏楽器や独唱者が伴奏無しに、自由に、即興的に演奏します．曲を振り返りながら、変奏などで独奏者の技量を発揮するCadenzaは、古典派以降の協奏曲に多く見られます．稀な例ですが、MozartのViolin sonata 第30番(第23番) K.306 の終楽章に、作り付けのCadenza (Piano中心) が有ります．また、Franz LisztのPiano独奏曲、ハンガリ狂詩曲(Ungarische Rhapsodien)の第2番にもCadenzaがあります．

本来、曲にどのような題を付けるかは、作曲家の自由です．また、出版譜面に印刷されている曲名も出版社により様々です．